

The 幽弦

第1部

『耳なし芳一』

15分

元暦2年3月24日壇之浦にて滅びたる平家一門の怨霊残りし赤間の関。今を去る赤間ヶ関の阿弥陀寺に盲目の芳一琵琶法師にておわしけり。さる夏の夜半過ぎ、見知らぬ武士訪ねけり。「芳一、我が御殿は、そなたの一曲を御所望なり。いざわれと共に参らせ給え」上がり来たれり大広間、やんごとなき方々の御前にて語りたもう。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり沙羅双樹の花の色、盛者必滅の理をあらわす驕れる者久しからずただ春の夜の夢幻の如くなり」芳一弾ずる琵琶の音は壇之浦にて滅びける平家の哀れ余りなく弾き語るこそ悲しけれ」それより三晩、芳一は裏の墓地にてただ一人鬼火に囲まれ・・・ろうろうと響きわたれり一曲は安徳天皇の廟の御前にぞおわしける。

一人芝居『蝉しぐれ小吉の泪』

井上ひさし原作 戯作者銘々伝より

出演 伊藤 一美 脚色・演出 藤谷清六 25分



私と清水えみこさんとの出会いは、ハロー山梨演劇塾公演『純愛幼稚園』で役者として共演した時です。その後、『春琴抄逆張り』『源蔵の恋』では琵琶の生演奏をして頂きました。清水えみこさんの琵琶の音色はいつもお芝居を一層引き立たせて下さいます。そして桃岳院チャリティー公演では『若きリチャードギア』『蝉時しぐれ小吉の泪』『師走の幽霊』の3作品を本堂にて上演させて頂きました。今回は清水さんのリクエストにより『蝉時しぐれ小吉の泪』を琵琶の生演奏に合わせて再演することになりました。どうぞお楽しみ下さい。

伊藤 一美

休憩 10分

琵琶の音色に魅せられて

十有余年前、南アルプス市の桃岳院というお寺で、風流な演奏会があると聞き尋ねてみました。心地よい時の過ぎ行く中、和服姿の瀟洒な出で立ちで毅然と厳かに琵琶を奏する若い女性に出会ったのです。この山梨で、この至近距離で、生の琵琶を聴く事が出来るなど思いもよらぬこと・・・感慨ひとしおでした。これがこのお寺の大黒さん、清水えみこさんとの邂逅でした。その後、桃岳院の演奏会は皆勤賞。目下清水えみこさんは方丈さん、ご子息、お孫さん達に囲まれて、しかも91歳のお父上を東京から南アルプス市へお迎えして孝養に勤んでおります。お父上は、太平洋戦争で散って逝った特攻隊最後の生き残りと言う貴重なお方で（当時のことをこの頃になってやっと語り始める）まだまだすこぶるお元気で。黙して語らぬお父上の想いをいつの日か琵琶に込めて語って頂けたらと思っております。自らを琵琶理と称してカラカラと豪快に飲んで笑う姿は、流石江戸っ子、それでいて繊細、且つ妖艶、何よりも人となりを大切に努力する努力の人、清水えみこさん、初めて演奏を聴いた時の感動が忘れられず、この想いを多くの方々と共有したいという一念で、陰ながら応援して参りました。令を重ねる程にこれからの楽しみで。ぜひ桜座で幽玄の音色をご堪能下さいませ。

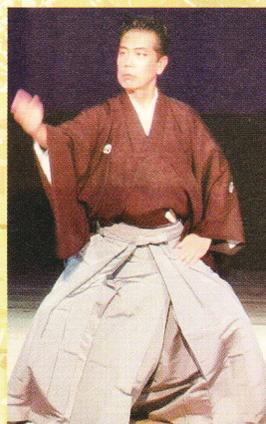
第2部

日舞『太田道灌』 藤間 素風

(琵琶のおはなし)

10分

頃は弥生の末つ方、霞棚引く武蔵野に、鷹狩りせんと道灌はいもなく駒に鞍置かせ狩野にこそは出でにけれ、立つ木も見えぬ原中を獲物を求めて行く程に、いつしか変わる空模様、黒雲次第に広がりて、たちまち降り来るにわか雨。かすかに見ゆる賤が家の軒をば借らんと近づきて、家戸打ちたたき乞いけるに、乙女は蓑を差し出さず、露もしたたる山吹を捧げつつ「七重八重 花は咲けども山吹の 養一つだに無きぞ悲しき 無きぞ悲しき」いとも恥ろうその様に歌の心を解しえぬ武勇に猛けき道灌は深く我が身を顧みて詩歌を学び後の世に薫るほまれを残しける。



藤間新流は、明治の元勳高橋是清の孫で六代目藤間勘十郎師に師事して女流舞踊家として活躍した藤間観素姉師が昭和33年に創流した流派です。奈藤羅の会は、家元直門である会主藤間繁素姉師が皷沢のお稽古場を中心に主に峡南地域で活動をしております。今回、清水えみこさんとの交流の御縁から出演させて頂くことになりました。師の振付け指導のもと、清水さんのオリジナル曲にあわせ、踊らせて頂きます。清水さんの琵琶の演奏に込めた思いを皆様に届ける一助となれば幸いです。

藤間 素風

『壇の浦』

25分

元暦2年3月24日の卯の刻に源平両軍船出して、壇の浦にて矢あわせとぞ定めける。兵船諸共三千余艘、平家の軍を囲まんとあせり競いて突き進む、この一団ぞ義経の摩下なりと知られる。平家の先陣は九国一の強の者、山鹿の兵藤次秀遠の精兵五百余艘、二陣は松浦堂三百余艘、平家の公達二百余艘で、三陣に続きたり。

速潮に乗る源氏の軍船、またたくうちに平家方の真只中を突き破れば、敵も味方も入り乱れ、さしも瀬戸も船におおわれ落葉浮ぶる川波の網代に寄する如くなり。

プロデューサー 深澤 鞠子

しょうしゃ